令和元年度第３回「医療・介護連携　顔の見える関係づくり交流会」を開催しました！

令和元年度第３回『医療・介護連携　顔の見える関係づくり交流会』を 11 月 14 日(木)に総合市民会館山の都アリーナにて開催しました。第３回目は中央地域包括支援センター、東地域包括支援センター及び南東地域包括支援センターの支援エリアに所在する医療機関、介護保険サービス提供事業所等を中心に、214 名の方にご参加いただきました。

進行役
山岸　修 氏

進行は東地域包括支援センターの山岸修氏、話題提供は山梨県中北保健福祉事務所の吉留慶子氏、事例提供は山梨県訪問看護ステーション連絡協議会の露木里恵氏に務めていただきました。

話題提供者
吉留　慶子 氏

話題提供では、「想いのマップ」の目的や内容をご紹介いただくとともに、活用事例を挙げながら「療養者本人がマップの全ての欄を埋めなくとも、多職種の支援者らが日常の中で何気なく聞き取った本人の言葉をマップに集約することで、本人の想いを汲み取り、寄り添った支援を提供できること」について、お話しいただきました。

事例提供者
露木　里恵 氏

その後の座談会では 28 グループに分かれ、事例設定として「病院から自宅に帰ることを望む終末期の療養者に対し、その方の想いを叶えるために自分の職種ができる支援」について、専門性を活かした多角的な意見交換を行いました。

様々な職種で構成されたグループ内では、対象者の生活状況や周囲との関係性も踏まえた上で、対象者の中にある「想い」を最大限叶えるための支援や連携について、熱心に話し合いました。

交流会中盤の発表の時間では、どのグループも時間いっぱいまで積極的に発言を希望し、会場内が大いに盛り上がりました。

発表者からは、「始めに医者がどう関わるかによって、その後の多職種支援のやり易さが変わってくる。『療養者本人のやりたいことを適えるために治療をする』ということを念頭に、本人の話しやすい環境下で希望を聞きたい」、「室内環境の整備や介護方法について提案することで高齢の介護者の不安を軽くし、療養者だけでなく家族みんなが『家に帰れて良かった』と思えるような支援をしたい」など、様々な見地から具体的なご意見をいただきました。

交流会終盤には参加者を代表して、薬剤師・歯科医師・医師の方から、交流会の感想をいただきました。「薬剤師としては退院後から関わることが多いが、入院中から在宅に戻るまでの他の職種の支援や流れを知ることが出来たので、今後に活かしたい」、「他の専門職が療養者の身体状況のみならず、人間性までも鑑みて、『寄り添う』支援を考えているところが印象的だった」、「普段は電話や FAX でやり取りをしているが、今日は相手の顔を見ながら活発な意見交換が出来たので、市が進める多職種連携や地域包括ケアのために役立つ会だったと思う」などの感想をいただきました。

今年度の開催は、この回を持ちまして終了となります。来年度につきましても、多くの専門職の皆様のご参加をお待ちしております。

交流会の様子を掲載します！